

セタシジミ資源の概況調査

井戸本純一・久米弘人

◆背景・目的

漁獲量が減少しているセタシジミ資源の現状とその動向を把握し、適正な資源管理や効果的な栽培漁業推進の基礎資料とするため、琵琶湖一円の漁場で実際の漁船漁具による採集調査を毎年実施している。なお、セタシジミの漁獲制限体型は、平成18年3月に作成された「琵琶湖セタシジミ資源回復計画」に基づき、漁業調整規則による殻長15mm以下から殻長18mm以下に引き上げられた。

◆成果の内容・特徴

- ・産卵期である禁漁期間中に漁業者に依頼して主要7漁場を含む18水域で貝桁網を一定時間曳網し、単位面積あたりの漁獲サイズ(選別前の未漁獲サイズを含む)のセタシジミ採集数および体型組成を調査した。
- ・2007年6月5日に調査した結果、主要7漁場における1㎡あたりのセタシジミ採集数は平均0.32個体/㎡で、2004～2006年(0.45～1.87個体/㎡)にくらべて低くなった。
- ・水域ごとにみると、沖島周辺漁場と長浜、今西では採集個体数は減少傾向であり、松原、磯ではほぼ横ばいであった。
- ・殻長18mm未満が占める割合は、主要漁場間の平均で2005年が71%、2006年が76%、2007年が78%となり、漁獲制限体型が遵守されていることが示唆された。
- ・産卵前の親貝(松原)の肥満度(軟体部乾燥重量/全湿重量)を過去のデータと比較したところ、1992年5月は4.4%、1995年3～6月は3.8%～4.3%であったのに対して、2006年4月は3.0%と低く、2007年4～6月は3.7%～4.0%に回復した。

◆成果の活用・留意点

- ・漁場における成貝の密度が低下しており、資源回復の遅れが危惧されるが、これは近年の親貝肥満度の低下による産卵量の減少が一因と考えられ、引き続き肥満度の推移と資源の動向を監視する必要がある。
- ・資源の早急な回復を図るためには、資源管理のさらなる徹底とともに、より効果的な種苗放流技術の開発によって資源添加を強化する必要があると考えられる。

表1 貝桁網による主要漁場における単位面積あたりのセタシジミ採集数

水域名 (主要7漁場)	1㎡あたりの採集個体数			
	2004年5月調査	2005年6月調査	2006年7月調査	2007年6月調査
沖島南西	0.79 (0.04)	0.39 (0.14)	0.54 (0.06)	0.19 (0.03)
沖島西	2.60 (0.11)	0.75 (0.05)	1.24 (0.08)	0.54 (0.08)
沖島東	2.97 (0.53)	0.42 (0.19)	0.21 (0.07)	0.13 (0.05)
松原	1.30 (0.50)	0.10 (0.07)	0.21 (0.09)	0.27 (0.13)
磯	2.22 (0.13)	0.73 (0.09)	0.76 (0.26)	0.78 (0.13)
長浜	2.01 (0.19)	0.33 (0.07)	0.17 (0.03)	0.09 (0.01)
今西	1.18 (0.13)	0.41 (0.05)	0.45 (0.10)	0.32 (0.02)
平均	1.87 (0.23)	0.45 (0.09)	0.51 (0.10)	0.33 (0.06)

()内は殻長18mm以上の個体数